

弁護士の目でみる「映画評論」その1

弁護士 坂 和 章 平

「『レインメーカー』にみるアメリカ法廷映画の面白さ」

\* \* \* \* \*

ジョン・グリシャムの小説はリーガル（法律）サスペンスと呼ばれ、アメリカで出版されるたびにベストセラーとなる。日本にもグリシャムのファンが多い。『ザ・ファーム／法律事務所』『ペリカン文書』『依頼人』『評決のとき』などは特に有名で、すべて映画化されている（現役弁護士である中嶋博行氏が九四年『検察捜査』で第四回江戸川乱歩賞を受賞、デビューしたため、日本でも近時本格的なリーガルサスペンスの分野が注目）。

グリシャムは自分自身がアメリカという訴訟社会の現役弁護士である。また彼は自身の弁護士としての専門知識と具体的な事件の体験をもとに、リーガルサスペンスの「主題」を吟味決定し、そこに読者をひきずりこんで離さないストーリー展開を創造することができる当代随一の小説家である。

九八年六月日本で上映された『レインメーカー』はフランシス・コッポラが監督・脚本・製作・総指揮をとり、『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』で主演した若手実力派スター、マット・デイモン（最近は『プライベート・ライアン』にも出演）が主演したグリシャム映画の六作目である。

\* \* \* \* \*

「レインメーカー」？日本人には聞きなれない言葉だが、これは「法律事務所にお金をふりまく弁護士」という意味。訴訟の勝利によって依頼者から莫大な成功報酬を獲得し、また著名事件で成功し名を挙げることを目指すアメリカの弁護士像の一端がこの言葉に表現されている。日本では弁護士の使命は「基本的人権を擁護し、社会正義を実現すること」（弁護士法一条）とうたわれているが、アメリカの弁護士はこれとは全く異質で、競争社会・実力社会・契約社会・訴訟社会アメリカの中で「勝ちがすべて」「結果がすべて」の論理を徹底させた知的専門家である。また一獲千金のアメリカンドリームを実現できる数少ない職業の一つである。

アメリカのリーガルサスペンス映画を見るときは、まず日本とアメリカの弁護士（像）の違いを頭に入れる必要がある。

\* \* \* \* \*

日本でも弁護士モノ、法廷モノのドラマは多いがほとんどがチャチで観るに耐えない。にわか仕立ての俳優が弁護士バッジを光らせ「刑法何条によれば・・・あります」とやる法廷シーンには、失笑が湧いてくる。

例外的に本格的な法廷ドラマは、岩下志麻がクールかつ知的な国選弁護士に扮し、桃井かおりが「おクマ」を演じて独特の名演技をみせた『疑惑』位しかない（野村芳太郎監督、加藤剛主演で七四年映画化された松本清張原作『砂の器』は日本映画の最高傑作だが、法廷モノではなく、推理モノ）。

他方アメリカでは、古くは『十二人の怒れる男』など、歴史に残る法廷ドラマの傑作が多い。アメリカの法廷モノが面白い理由の一つに陪審制がある。アメリカの弁護士は職業的裁判官ではなく、素人の陪審員を法廷でいかに説得するかが最大の使命だ。そのため弁護士は必死に証拠を集め、証人を「訓練」し、いかに陪審員の心をつかむかに苦心する。

アメリカでは、弁の立たない弁護士はそれだけで一流になれないし、自己演出の下手な弁護士は敗訴の裏切りを見る確率が高い。

日本の民事訴訟では、事前に自分の主張を書いた準備書面を提出し、法廷では事前にこれを読んだ裁判官との間で「〇〇を陳述しますね」「ハイ」の問答で終わるから、傍聴人は何をやっているのか皆目わからず退屈この上ない。だがアメリカの訴訟は陪審員を前にした原告と被告の丁々発止のやりとりだから、傍聴人はリング上のボクシングの試合を見る感覚で勝負のなりゆきにひきずり込まれていく。

\* \* \* \* \*

『レインメーカー』の主人公ルーディはロースクールの三年生。一流法律事務所へ就職し、司法試験に受かって弁護士となり、大事件を手掛けて名を挙げレインメーカーになることを夢見ている。

何のコネもない一介の苦学生を雇ってくれた法律事務所はブルーザー弁護士の事務所。ここは交通事故の被害者から強引に損害賠償事件の委任状をとるためにルーディに病院通いを指示し、何としても依頼人を獲得しろと叱咤するような事務所。また脱税、陪審員との裏取引のウワサもある悪徳弁護士事務所だった。しかしとにかくルーディはブルーザー事務所に就職。ここに勤める古株の司法試験浪人デックを相棒として仕事の第一歩を踏み出した。

デックは司法試験には受からないが、訴訟の実務に精通した有能・便利な男。ブルーザーの事務所が脱税でFBIの手入れを受けるとの情報を得たデックは、ルーディに独立話をもちかける。無事司法試験に合格したルーディはこれに同意し、小さいながらもルーディ法律事務所が誕生した。

ルーディの手持ち事件はブルーザー事務所から引き継いだ二件だけ。一件はアメリカの典型的な下層階級層であるブラック一家の事件。ルーディと同年代の息子レイ・ブラックが白血病にかかったため、母親は保険契約に基づいてベネフィット保険会社に対し保険金請求をしたが、支払を拒否され途方にくれている。父親は飲んだくれでお金がないため、唯一の治療法たる骨髄移植手術も受けられない。ルーディは、「保険金請求は当然の権利だ」と説得。レイから委任状をとり、レイはルーディの依頼者となる。難病にもかかわらず両親を心配し、生きることへの情熱を燃やし続けるレイの姿勢にルーディは感動し、レイは依頼者とともに心の友となる。

もう一件は夫から暴力を受けて入院中のケリーの離婚事件。病院のカフェーで司法試験の勉強をしていたルーディは痛々しい彼女の姿を見て同情し声をかけた。暴力を振るいはじめると手がつけられなくなる夫の怖さを知っているケリーは、とても自分から離婚の申し出などできないという。だがルーディは「君の幸せのためには何としても離婚が必要だ」「そのための法的手段を自分がとる」「勇気をもって立ち向かえ」と彼女を励ました。そしてケリーへの同情はその後いつしか愛情へと変化していく。

\* \* \* \* \*

映画はベネフィット社への保険金請求事件の展開を丹念に追っていく。簡単に示談でケリーがつくと予測し、見下したように示談金を提示するべ社。

訴訟費用の負担すらきびしい低所得階層が大企業を被告とし、白血病に罹患したこと理由に訴訟を提起するなど、べ社の顧問弁護士たるドラモンドには到底考えられないバカげた冒険だった。

しかし正義感に燃える（駆け引き未熟な？）ルーディは、そんな申し出を断固拒否。訴訟提起を決意する。ルーディは大胆（無謀？）にも保険金請求を拒否した当時の担当者の証言をとるため、ベネフィット社の本社へ乗り込んだ。

ところが意外にも、当時の査定係の女性社員ジャッキーは依頼退職すみ。退職後行方不明となっていた彼女を捜し当てたのはルーディの優秀な相棒デック。覗いていてハラハラする、違法スレスレ（そのもの？）の行為を繰り返しながら、デックはジャッキーに近づき、彼女から「会社の指示で保険金の請求はすべて拒否しました」「解雇の際、依頼退職の辞表と引き換えに一万ドルの口止め料を受け取った」との供述を獲得した。

ハラハラドキドキのシーンの連続の中、法廷で待つルーディのところへデックとジャッキーが到着。ジャッキーは証言台に立つ。さらに追い打ちをかけるようにルーディは彼女が退職の際持つたべ社の秘密マニュアルファイルを証拠として提出した。これでルーディの勝訴は確定！と観客は思ってしまう。だが、アメリカの法廷はそれほど単純ではない。ドラモンドは反対尋問を開始。ジャッキーは上司と愛人関係にあり、彼女はその上司を恨んでいたことを根ほり葉ほりいたぶるように尋問。

「会社をやめたのはそのせいだ」と証言させる。さらに「秘密のマニュアルは盗品だから証拠採用はできない」とのドラモンドの「異議」が認められた。結局ジャッキーは「お役に立てなくてごめんなさい」と泣きながら証人尋問を終わってしまう。

法廷の状況は逆転。ルーディは苦境に。またこの訴訟の間、白血病のレイは判決を聞くこともないまま衰弱し他界した。しかしルーディは・・・。

資力も情報もない、だが心の友レイを救いたいという熱情にあふれ、その知力のすべてを動員する若き弁護士ルーディ。彼は相棒デックの協力を得て、べ社の最高経営責任者キーリーを反対尋問で追いつめ、骨髄移植は白血病の一般的な治療方法であることを明らかにしていくのである。証拠調べがすべて終わり最終弁論に立つルーディ。生前のレイの姿をスクリーンに映し出し、レイ自身に語らせるルーディ。陪審員の人間としての心に訴えたルーディの最終弁論だ。そしてルーディはじっと陪審員の評決を待った。陪審員の評決は？何とそれは現実的損害賠償として一五万ドルの支払を命ずる他、五、〇〇〇万ドルの懲罰的損害賠償（違法な行為を罰し、同様の行為を防止するために命ずる制裁的な賠償金）を命ずる全面勝訴の判決だった。

しかしこの訴訟で数々の悪行が明るみに出たベネフィット社は倒産。ルーディは賠償金を手にすることはできず、レインメーカーにはなれなかった。

\* \* \* \* \*

『レインメーカー』は、レイの保険金事件とケリーの離婚事件を二つの軸として描く。ケリーへの同情がいつしか愛情にかわり、ひょんなことから殺人事件に巻き込まれたルーディが彼女のために奮闘する数々のシーンも感動的だが、何といつてもスリリングなのは、べ社に対する保険金請求事件での証拠収集の努力や法廷での息詰まる攻防である。

法廷での白熱の証人尋問は、弁護士が最も神経を使う本番の舞台だ。

また陪審員に対する最終弁論は、法廷に提出された証拠に基づいて証拠の優劣やその意味を整理して陪審員に理解させ自己の主張の正しさを訴えるものだが、弁護士も人間、陪審員も人間である以上、そこに心の触れ合いがあるか否か、心の叫びが通じるか否かによって説得力に大きな相違が生まれる。

アメリカの弁護士は、この法廷での勝敗にすべてを賭けて、依頼者とともに努力を続けている。

レインメーカーを夢見た苦学生ルーディは司法試験に受かり、弁護士として二つの事件を担当したが、レインメーカーにはなれなかった。だがこの仕事の中で彼がレインメーカー以上の何かを獲得したことはすべての観客が理解できるだろう。

お金以上の価値ある何か、それは心の友であり、またケリーへの愛であることは疑いない。

\* \* \* \* \*

『レインメーカー』という映画は特別の法律知識がなくともストーリー展開がわかるし、法廷シーンも迫力があり、十分ハラハラドキドキする作品だ。これは弁護士グリシャムの小説家としての才能に負うものであり、グリシャム作品すべてが大ヒットするのも十分うなずける。

しかし弁護士の私に言わせれば、日本的一般市民がアメリカの法廷サスペンス映画を観る場合、よりその映画を理解し、より法廷のスリルや弁護士自体に興味をもつためには、是非知っておいて欲しい知識が数多くある。

その第一は陪審制。日本人は法的に素人の一般市民が陪審員に任命されて裁判官の役割をすることはポンヤリとわかっていて、陪審制の意味や長所、日本が採用していない理由などはまず知らない。また、戦後日本の刑事訴訟法にはじめて導入された伝聞証拠の禁止、直接主義などアメリカ流の証拠法のルールの正確な理解は難しい。

第二は法廷の華である証人尋問の意義（一定のルールに則った主尋問・反対尋問の中で陪審員が真実を認定する）とそのルール。これはディベート教育を受けず、議論下手な日本人には最も苦手な分野だ。日本の法廷での証人尋問は、メモを片手にダラダラと自分の言い分をなぞるのが主尋問だし、質問すればするほど主尋問の結果を補強してしまうヘタクソな反対尋問が一般的だ。『レインメーカー』の法廷シーンのように緊迫した、これでもかこれでもかと手に汗を握る証人尋問は日本ではまず体験できない。

第三に日本人に理解困難なのは、レインメーカーという言葉が存在するアメリカの弁護士の成功報酬。アメリカの弁護士は、お金の面だけをみて悪く言えば「一発、事件で当てるなどを狙っている山師」と言える面を確かにもっている。しかし人種混在の国・実力主義の国アメリカでは、実力を發揮して依頼事件で成功すれば莫大な報酬を得るのは当たり前というのが大前提だ。

こんな点を学習し、一定の法的な視点をもってアメリカの法廷サスペンス映画を観れば、より一層その理解が深まり新たな興味が生まれること請け合いである。今回『レインメーカー』を素材に、弁護士の目から見たグリシャムの法廷サスペンス映画を紹介したが、次回はまた別の作品で。乞う御期待。

\* \* \* \* \*

映画は他方、ケリーの離婚事件でも劇的に展開するルーディの姿を描く。夫との離婚を決意させ、離婚の訴状を夫に送り、夫の留守中ケリーと共に荷物を取りにいったルーディは、そこに帰ってきた夫と出会ってしまう。怒り狂い暴れ回る夫に対し、ルーディはケリーの身を守るために、夫が振り回す金属バットを奪いとり、逆に夫に対して打ち下ろした。

倒れ込む夫を見て、ルーディが事件に巻き込まれることを察じるケリーは、ルーディにその場を去るように告げ、自らは倒れている夫に対し、バットを振り下ろした。ルーディは愛するケリーのため、また自分のために弁護士としてケリーの殺人事件に正面から立ち向かう。そして正当防衛＝無罪の判決を獲得するのである。

\* \* \* \* \*

『レインメーカー』は、レイの保険金事件とケリーの離婚事件を二つの軸として描く。ケリーへの同情がいつしか愛情にかわり、ひょんなことから殺人事件に巻き込まれたルーディが彼女のために奮闘する数々のシーンも感動的だが、何といつてもスリリングなのは、べ社に対する保険金請求事件での証拠収集の努力や法廷での息詰まる攻防である。

法廷での白熱の証人尋問は、弁護士が最も神経を使う本番の舞台だ。

また陪審員に対する最終弁論は、法廷に提出された証拠に基づいて証拠の優劣やその意味を整理して陪審員に理解させ自己の主張の正しさを訴えるものだが、弁護士も人間、陪審員も人間である以上、そこに心の触れ合いがあるか否か、心の叫びが通じるか否かによって説得力に大きな相違が生まれる。

アメリカの弁護士は、この法廷での勝敗にすべてを賭けて、依頼者とともに努力を続けている。

レインメーカーを夢見た苦学生ルーディは司法試験に受かり、弁護士として二つの事件を担当したが、レインメーカーにはなれなかった。だがこの仕事の中で彼がレインメーカー以上の何かを獲得したことはすべての観客が理解できるだろう。

お金以上の価値ある何か、それは心の友であり、またケリーへの愛であることは疑いない。

\* \* \* \* \*

『レインメーカー』という映画は特別の法律知識がなくともストーリー展開がわかるし、法廷シーンも迫力があり、十分ハラハラドキドキする作品だ。これは弁護士グリシャムの小説家としての才能に負うものであり、グリシャム作品すべてが大ヒットするのも十分うなずける。

しかし弁護士の私に言わせれば、日本的一般市民がアメリカの法廷サスペンス映画を観る場合、よりその映画を理解し、より法廷のスリルや弁護士自体に興味をもつためには、是非知っておいて欲しい知識が数多くある。

その第一は陪審制。日本人は法的に素人の一般市民が陪審員に任命されて裁判官の役割をすることはポンヤリとわかっていて、陪審制の意味や長所、日本が採用していない理由などはまず知らない。また、戦後日本の刑事訴訟法にはじめて導入された伝聞証拠の禁止、直接主義などアメリカ流の証拠法のルールの正確な理解は難しい。

第二は法廷の華である証人尋問の意義（一定のルールに則った主尋問・反対尋問の中で陪審員が真実を認定する）とそのルール。これはディベート教育を受けず、議論下手な日本人には最も苦手な分野だ。日本の法廷での証人尋問は、メモを片手にダラダラと自分の言い分をなぞるのが主尋問だし、質問すればするほど主尋問の結果を補強してしまうヘタクソな反対尋問が一般的だ。『レインメーカー』の法廷シーンのように緊迫した、これでもかこれでもかと手に汗を握る証人尋問は日本ではまず体験できない。

第三に日本人に理解困難なのは、レインメーカーという言葉が存在するアメリカの弁護士の成功報酬。アメリカの弁護士は、お金の面だけをみて悪く言えば「一発、事件で当てるなどを狙っている山師」と言える面を確かにもっている。しかし人種混在の国・実力主義の国アメリカでは、実力を發揮して依頼事件で成功すれば莫大な報酬を得るのは当たり前というのが大前提だ。

こんな点を学習し、一定の法的な視点をもってアメリカの法廷サスペンス映画を観れば、より一層その理解が深まり新たな興味が生まれること請け合いである。今回『レインメーカー』を素材に、弁護士の目から見たグリシャムの法廷サスペンス映画を紹介したが、次回はまた別の作品で。乞う御期待。